

伝統工芸品を支える用具

伝統工芸品とは、昔から作られている漆器、織物、陶磁器、木工品、竹工品などです。伝統工芸品と呼ばれるものには、生活用品として日常生活に使用されているものもあれば、高度な技に支えられた工芸品もあります。

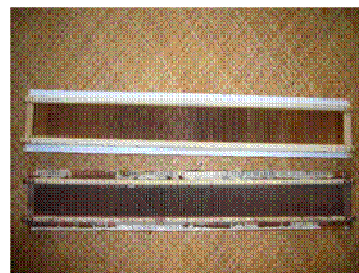
日本には、全国各地に伝統工芸品の産地があり、経済産業省は 200 以上の産地を伝統的工芸品産業として指定し、産業の育成・保護を行っています。私たちが、日常使用している製品はこれらの産地で生産されています。一方、文化庁では、優れた伝統工芸の技術・技能を有する職人等を重要文化財として指定し保護しています。

伝統工芸品の生産において用具は非常に重要で、用具がなくなれば消えてしまいます伝統工芸技術が多くあります。近年、この用具製作の後継者がいなくなり、職人の高齢化とともに年々製作者が減少しています。その背景として、プラスチック製品や化学繊維製品の普及、生活の洋風化などによる伝統工芸品（あるいは伝統的工芸品）の需要低下があります。その結果、用具の需要も減少し、製作者の生活が成り立たなくなり、製作者の数が大幅に減少してしまいました。また、用具の製作に必要な原材料が入手できなくなり、途絶えてしまうという問題もあります。

このような状況から、伝統工芸品の分野によっては、用具製作者の育成が緊急の課題になっています。以下に、用具の製作者の減少や原材料の入手困難等の問題により、将来の供給が懸念されている幾つかの例を消化します。

◇竹箄（たけおさ）

手織り機に使用される用具です。現在は、主に金属製の箄が使用されていますが、竹箄を使用して作られた織物は独特の風合いがあるといわれています。製作者が途絶え、現在、日本竹箄技術研究会などが人材の育成を行っています。



◇簀桁（すげた）

楮（こうぞ）などの原料から和紙を作る時に使用する用具です。テレビなどで見た人も多いと思います。特に、紙を抄く簀には工芸品のように美しいものがあります。昔は、和紙の産地に必ず製作者がいましたが、現在では一部の産地に少



数の人しかいません。産地による製作者の育成が行われ、若い製作者が育ちつつあるようです。

◇蒔絵筆

根朱筆（ねじふで）といわれる最高級の蒔絵筆は、沼地などに生息するくまねずみの毛の入手が出来なくなり途絶えてしまいました。この問題は、以前、NHKの番組で取り上げられました。現在、石川県で復活に向けた取り組みが行われています。蒔絵筆の製作者は数人程度で、熟練の職人がいなくなりました。



ねずみの毛を使用した本根朱筆

◇漆刷毛

お椀などの漆器に漆を塗る時に使用する刷毛です。現在では、製作者が1～2名程度となってしまいました。女性の髪毛を使用して作られます。最高級の漆刷毛は日本女性の古かもじを使用したものですが、日本髪を結う女性がいなくなって古かもじを入手できなくなり、途絶えるのは時間の問題となっています。現在は主に、中国人の女性の髪毛などが使用されています。



泉 清吉上塗り刷毛